

蕪村における「浅川」のイメージ

一 瀬 幸 子

蕪村には「浅川」を詠んだ句が多い、それらの句はいかなる創作意識によって詠まれたのであろうか。

夏河を越すうれしさよ手に草履

「丹波の加悦といふところにて」という前書があるところからみると、この句は宝暦四年から同七年にかけての作と思われる。十年の間、関東から東北地方にかけて放浪した末、やっと京都に帰りながら三年を経ずして再び京をすて、丹後に出て行ったのである。丹波とするのは蕪村の誤りであろう。丹後宮津から四里ほど離れた加悦といふところに草庵を結ぶ日道上人をたずねた時、

蟬も寝る頃や衣の袖畳（遺草）

と詠み、ついで「前に細川のありて潺湲と流れければ」と前書して、「夏河」の句を詠んでいるのである。まぶしいばかりの陽の光を浴びて手に草履をもちながら喜々として夏河をわたる蕪村の姿が眼に浮ぶ。

浅瀬、浅川は蕪村の好んだ素材である。

みしか夜や浅瀬に残る水の月（安永四年）

短夜や浅井に柿の花を汲む（安永五年）

浅河の西し東しす若葉哉（新花摘）

みしか夜や足跡浅き由井の浜

（安永九年
連句会草稿）

ぬけかけの浅瀬わたるや夏の月（句集）

我影を浅瀬に踏てすゝみかな（手紙）

月見舟させるを落す浅瀬かな（夜半覺）

と詠み、連句にも大魯の、いろ／＼に夜の変わり行月の雲、につけて秋の浅瀬を漕わたる舟（安永七年）がある。

明和五年四月まで讃岐に滞在し、蕪村が三葉社句会に力を入れ、事実上夜半亭（巴人）の後継者となるのは明和五年夏以降である。

この頃より安永年間にかけて急速に句作がのびるが、浅瀬、浅川によせる句作がめだつのもこの頃である。浅瀬、浅川に寄せる心は又、それを踏みわたる喜びでもあった。

秋雨や水底の草を踏みわたる（明和五年
句稿）

ちか道や水ふみ渡る臯雨（新花摘）

さみだれや水に銭ふむ渡し舟（新花摘）

しつかさや清水ふみわたる武者わらし（遺稿）

こからしや野河の石をふみわたる（遺稿）

古河をふみわたる身にしくれ哉（遺草）

蕪村は晩年よく浪花の地に足を向けている。書簡によって知られるのは安永五年十月十八日付東菑宛書簡、安永七年三月二十四日付まさな宛書簡の二回であるが、その他、大魯、几童らと布引瀧をみ

ており、「大魯が兵庫の隠栖を几董とともに訪ひて人々と海辺を吟行しけるに」として

夙に鰯吹るゝや鉤の魚
とよみ、大魯の死を悼んで

泣に來て花に隠るゝ思ひかな

と詠んでいるところからも、兵庫に遺族を訪問したことが知られる。浪花の地を訪問すれば「川」に寄せる句作が多いのは当然であるが、それにしても「川」への執心は何に起因するのであるうか。

もつとも、このような川越しのイメージはすでに延享二年、早見晋我を追悼した「北寿老仙をいたむ」詩の中に

「友ありき河をへだてて住にき」として、晋我を含めた故人の思い出としてのべられているが、安永三年の夏には巴人三十三回忌に當って、その追善のために興行した「むかしを今の」序において「みそみめぐりの遠きを追ひ、強て師のいまそかりける時の看をなす」といふことを、門下の人々とともに申はとさぬ。」として、その追善に巴人の

啼ながら川越す蟬の日影哉

を発句として二歌仙を興行している。それは彼が俳人として第一歩をしろした日の感慨をこめて巴人に捧げた追善であった。ここにもみそみめぐりの思い出の中に巴人の句を発句にして川越のイメージがあざやかにとらえられている。そして安永六年、春興帖「夜半樂」を板行、その中におさめる「春風馬堤曲」は「やるかたなき」懐旧の情を幼年の日の記憶に托して詠んでいる。

やふ入や浪花を出て長柄川

春風や堤長うして家遠し

北長柄の渡し口から川を隔てゝみた馬堤の眺望であろう。

「余幼童之時、春色清和の日には、必友たちと此堤上にのぼりて遊び候。」とのべた毛馬堤の思い出は、川渡りを楽しんだ幼い日の歎びとして蕪村の心に甦えるのである。

春風馬堤曲第四首

溪流石点々 踏石撮香芹

多謝水上石 教儂不沾裙

は、「輞川集」の中の「白石灘」の王維の詩

清浅白石灘。綠蒲向堪把。家住水東西。

浣紗明月下。

と、裴迪の

跂石復臨水。弄波情未極。日下川上寒。

浮雲淡無色。

の句を踏まえていることは確かだとしても、「跂石復臨水」のよるこびは若き日の蕪村の実感であり、「川渡り」の句を作らしめたのであろう。それは又、同じように澗河歌にもみられる。

春水浮梅花 南流菟合澗

錦纜君勿解 急瀨舟如電

京住二十年、漸く望郷の思いにかられた彼は、川くだりに托して懐旧の情を切々と歌いあげるのである。

そして同年四月、王維の亡母追善にあやかったとみられる「新花摘」は、その文章の項でもわかるようにその内容が蕪村二十七才にして江戸を去り、下総結城の雁宕のもとに身をよせていた頃のこと、ひたちのくに下館のこと、結城の早見晋我の思い出など、その多くは彼の流浪十年の思い出につながるものである。母への追慕は

又彼の若き日の思い出を甦らせる。

このようにみえてくると、安永年間には蕪村にとってどのような年であつたのであろうか。この頃の蕪村は詩、画ともに円熟してゆく時期にあつたが、又一方心身ともに急に疲労の目立ちはじめた時期でもあつた。安永三年九月二十三日付、大魯宛書簡には

「愚老とかく風塵にくるしみ、例の通句も無之無念に御座候。」とあり、安永四年閏壬月十一日付、霞夫、乙総両人宛書簡では

「扱ても愚老義、当年は悪星の障碍に候や、夏秋を経て病に犯され、漸く全快いたし候処、又々霜月下句ヨリころあしく、壬月ニ至り候てハ以の外ニ而、とかく老病と被_レ存候」とあり、又、安永五年六月二十八日付霞夫あて書簡に「愚老義去年中より当春へかけ長病」とあつて病気がちであつたことが知られる。そして同年九月に「老懐」と題して「去年より又淋しひぞ秋のくれ」とよんでゐる。

この頃から蕪村はつとめて意識的に懐旧の情を深めていったようである。そしてこの頃、うめ（安永四年二月二十八日付、安永五年十月十八日付、十二月十三日付、夫々東魯あて書簡）、小糸（安永三年六月三十日付、几董あて書簡、安永六年三月六日付、佳棠あて書簡）という女性との交渉があつたことが、書簡により察せられるが、病気がちであつた娘くのへの愛情は並々ならぬものがあり、（安永四年壬月十一日付、霞夫、おとふさ宛書簡、安永五年四月十五日付、霞夫宛書簡、安永五年六月十三日付、霞夫宛書簡、安永五年九月六日付、まさな宛書簡）漸く、安永五年十二月京都の西洞院のさる町家に縁づけながら「むすめ事、先方爺々専ら金まうけの事このみに而、しをらしき志し薄く、愚意に齟齬いたし候事共多く候ゆえ、取

返申候、もちろんむすめも先方の家風しおきかね候や、うつ／＼と病気づき候故、いや／＼金も命ありての事と不便に存候而、やがて取もどし申候。」（略）（臯二十四日付、正名、春作宛書簡）とあつて、翌六年五月には早くもとりもどしている。うめ、小糸といひ、又、娘くのを思う切ない程の愛情は彼の書簡のいたるところにみられるが、そこには蕪村の老の自覚と共に郷愁ともいふべき心が動きはじめているのをみるのである。「浅瀬」「浅川」によせる心は、このような老年期に急激に蕪村を襲つた懐旧と郷愁の心であらう。そして「浅き」によせる心は更に次の如き作品へと結集する。

足よはのわたりて濁るはるの水（句集）

しのめや鵜をのがれたる魚浅し（句集）

すし桶を洗へば浅き游魚かな（新花摘）

不二ひとつつみ残してわかばかな（句集）

雨後の月誰ソや夜ふりの脛白き（句集）

これらの句は夫々、安永末年の句作である。

一方、芭蕉は「浅き」への関心を別の時点でもとらえている。彼の句中に「浅い」という語句は一つも使用されていない。唯、芭蕉随聞記に、

「翁今思ふてい体は浅き砂川を見るところ、句の形、付心ともに軽きなり。其処に至りて意味あり。」とある。芭蕉が晩年提唱した「軽み」の説明として引かれる箇所であるが、蕪村のように現体験として把握した「浅き砂川」ではない。芭蕉と蕪村の「浅川」へよせる心は根本的に違ふのである。

水墨面を愛した蕪村が水に心を寄せるのは当然としても、明和末年より安永年間にかけて所謂、身心のおとろえを自覚しはじめた老

年期に、回春の情と共に蕪村を襲った懐旧と郷愁の心が、若き日の現体験としての「浅川わたる」句作りを意識させたとみる事が出

来るようである。

(本学助教 彦)

解釈と鑑賞

狭衣物語 解釈 (7)

本 田 義 彦

源氏の宮の御かたちかくすぐれ給へる御名高くて、春宮のいとゆかしう思ひ聞えさせ給へるに、「さこそはつひの事ならめ」と思したり。うちの上も、昔の御遺言思し忘れず、あはれに聞え交はさせ給ひながら、おぼつかなくて過ぐさせ給ふもくちをしきを、「さやうにてうち住みもさせ給へかし」と、大臣にも聞えおどろかさせ給ひけり。されどいとどしき御有様を、「猶今少し盛りにねび整ひてこそ」など、おぼろげならず思し掟つる御有様なるべし。

〔口訳〕

源氏の宮の御容貌がこのようにすぐれていらっしやるという御

評判が高くて、皇太子がたいそう心ひかれ申しいらっしやるので、「結局は皇太子妃ということに落着くだらう」と、堀川大臣は思っておられた。帝も、昔の故先帝の御遺言を思い忘れず、源氏の宮と親しく音信を交してはおられたが、気がかりな状態で離れくにお暮しなさるのも残念なので、「皇太子妃ということに宮中で暮すようにおさせ申して下さいよ」と、堀川大臣にも注意申しなさるのであった。しかし、今までよりも一段と美しさのましてゆかれる源氏の宮の御様子を見ては、「やはりもう少し娘盛りに御成長なさってから、」など、堀川大臣は源氏の宮の結婚に対しては、ほんやりとではなくきっぱりと思ひ定めていらっしやる御様子であるようである。

〔注記〕

○源氏の宮——故先帝の晩年に中納言の娘の御息所との間に生れ